
ふたつの世界

あくた咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたつの世界

【Nコード】

N9040Y

【作者名】

あくた咲希

【あらすじ】

一花が迷い込んだのは、荒廃した自分の町。そこは異世界、パラレルワールド。そこで出会った斗真と、妹の由真とともに、「こちらの世界へ戻ってこようとしたのだが……」。

第一章・陰と陽

第二章以降執筆中

廃図書館のトイレの屋根は、半分以上が崩れていた。見上げると灰色の空がやけに近く、息苦しい。

咳をしながら、あたしは目線を元に戻す。

個室は両側に四つずつ並び、向かって右奥のドアが甲高い音を立てていた。蝶番が外れかけていて、ここだけ中が見える。

でも、白い便座が見えるわけじゃない。

薄暗い、もやもやした何かが淀んでいる。

「、行くぞ！」

斗真いっまの掛け声に合わせて、あたしたちは次々とそこへ飛び込んだ。あたしは斗真の手をしっかりと握り、目をつぶっていた。

鼓膜に圧力がかかる。肺が押し潰されるような感覚。ここは、世界と世界の狭間。

時間にしてほんの数秒後、体を包む空気が変わったのを実感してゆっくりと目をあける。

窓から差し込む陽光の中に白のタイルが浮かび上がった。座り込んでも抵抗ないほど綺麗なタイルに、プリーツのスカートが円形に広がる。太ももの裏側が床にくっついて冷たい。

斗真が、つないだ手を引っ張って立たせてくれた。彼も緊張していたみたいで、てのひらに少し汗をかき、指はこわばっている。

あたしたちはろくに顔を見合わすこともしないで、そばに倒れている由真ゆまちゃんの背を揺すった。ワンピースのセーラー服は裾がふわふわしてやわらかくて、のぞいた華奢な脚をくすぐる。でも、気を失っているみたいで反応はない。

彼女は斗真の三つ違いの妹、あたしと同じ高校一年生だ。兄に対して、なんだかよく理解しがたい、歪んだ情念を持っているようだ。曰く、「兄さんは嫌い。そんな兄さんに群がる女どもも大嫌い」。そうでありながら、むりやりあたしたちについてきた。

「起きないかな？ このまま連れて帰る？」

斗真に訊くと、彼は変な顔をした。どうしてだよ、と質問したあたしに疑問を投げかける顔つきだ。

はからずもあたしたちはすっかりと目を合わせてしまい、慌てて顔をそらす。いまだにつないでいた手も、ぱつと離して背後に隠した。

「えっと、あたしはもう送りとどけてもらったわけだし。斗真と由真ちゃんは帰らなきゃ」

あけつぱなしになっている個室のドアに視線をやるうとすると、斗真の大きな手に遮られた。てのひらには傷跡がたくさんある。小さなもの、大きなもの。

「俺はいちか一花というつもりなんだけど」

「え」

「由真は……家族がいるから、返してやらないとな」

「家族つて、斗真の家族でもあるでしょ？」

「由真だけでもいたらいいだろ」

ふたりの家の事情がどんなだとか、あたしは知らない。なにせ、まだ会って数時間もたっていない。

わかっているのは、斗真たちが向こうの世界の住人ということ。あたしは、こつちの人間だということ。

あたしは試験勉強をしにきたこの図書館で、向こうの世界に迷い込んだのだ。

ほんの数時間前のことだ。用がすんで顔を上げて、トイレが急にボロくなっていたのに驚いた。何しろ空が見えるのだ。混乱しつつも後始末をして、個室から出たときには思わず悲鳴がもれた。

突然、何もかも景色が変わっていたから。

荒れ果てた図書館はそら恐ろしくて、泣きそうになりながら外へ出た。その外もまた廃墟と、ガタガタのアスファルトばかりで生きた心地がしない。知らないうちに戦争が起こり、ものすごい威力の爆弾が町を焼いたのだと思った。

隆起した道をさまよいながら、いつのまにか泣いていたあたしを見つけたのが斗真で、壊れていない隣りの町へ連れていってくれた。そこには学校もあり病院もあり商店街もあり、一見なんの変哲もない町で、斗真の家もあった。由真ちゃんはピアノのお稽古に行くところだったけれど、あたしたちについてきた。

『どこの者だ』

通りすがりのおじさんに問われたあたしを、斗真がさりげなく背にかばってくれた。あたしはおじさんの鋭い目と、眉間の深い皺に薄ら寒いものを感じて縮こまった。

(ここは、あたしのいた世界じゃない)

気づきはじめていたことを、その瞬間、確信した。

そして、あたしは一刻も早く退散しなきゃいけないのだと悟った。それは斗真もわかってくれていて、むしろ彼は出会ったそのときから知っていたのだと思う。

おじさんをやりすごしたあと、あたしの証言をもとに、図書館に急ぎたどりついた。

もやもやとした個室を前におじけづいたあたしを斗真が励ましてくれた。一緒に淀みに飛び込んでくれて、今ここにいるというわけだ。

「斗真は、こっちにいたらいけないのかもしれない」

あたしは向こうの世界で身の危険を感じた。あのおじさんに捕まったらどういうことになるか、悪い想像しかできなかった。

「誰にも見つからないうちに、早く」

「こっちの人間は俺たちを知らない」

斗真は神妙に首を振り、視線はそらしたまま、あたしの髪を撫でた。

「一花も知らなかっただろ。知っているのは俺たち側の人間だけだ」
斗真の言わんとしていることは、わからないではなかった。ただ、ぴんとこないだけで。

あたしが異世界の存在を知らなかったように、こっちに住むみんなが知らないだろうことは予想がつく。

でも斗真たちはみんなあたしたちのことを知っていて、あたしたちが彼らの世界に迷い込むことを許さない。

「由真だけ放り投げてもいいんだが、あの町は長くいるとよくないところだからな。起こして、さっさと家に帰るよう説得する」

説得を聞き入れてくれるのか、はなはだ疑問ではあった。由真ちゃん、斗真を置いていくはずはない。

斗真が由真ちゃんを抱き起こそうとしたとき、ピロピロと軽快なメロディが鳴った。バイブの振動音も聞こえる。由真ちゃんの制服のポケットが震えている。

「携帯？」

あたしは手を伸ばしかけて、はっとして止まった。由真ちゃんの携帯電話なら、当然かけてくるのは向こうの世界の人だ。

異世界から電波が届くものなのかと、斗真も訝しんだらしい。

あたしたちは静かに息を呑んで、メロディがやむのを待った。そして、着信が途切れる前に、由真ちゃんが目を覚ました。

「くん？」

彼女が携帯に耳をあてた。相手の名を呼んだらしいけど、とっさのことで聞き取れない。

「ん。ごめん、ちょっと図書館みつけて、寄つてて。すぐいく」
会話が終わると、由真ちゃんは携帯を握りしめてあたしを見上げた。

斗真は片膝をついて、起き上がった彼女の肩を支えながら　心なしか首を傾げていない？

「ごめんね。由真、貧血持ちだから。助けてくれたの？」

それを聞いて、今度こそ斗真が首を傾げた。

あたしにも由真ちゃんの雰囲気違って見えて、呆けたように口をあけてしまう。お嬢様ふうで、自分のことを名前で呼ぶのも同じなのに、別人のよう。

由真ちゃんはワンピースの裾を整えながら立ち上がると、ぺこりと頭を下げてトイレを出ていった。

残されたあたしたちは、どういうこと、と顔を見合わせる。

「由真ちゃん、行っちゃったよ？　誰から電話だったのかな」

「男友達がいるという話は聞いたことがないんだが」

「ここ以外に、向こうに帰れる場所があるのかな」

「あるかもしれないが……、わざわざ探しにいかないだろ」

斗真は頭をかき、あたしのすぐそばに立った。彼は背が高く、あまり近くにいると、あたしからはよく顔が見えない。

「こういうことが」

ぼそりと言うのが聞こえた。かすかな舌打ちも。

追求していいのか迷いながら、あたしは斗真の袖を引っ張り、訊いてみる。

「なんのこと？」

「……神隠しの正体はこれか、って」

背筋がぞつとする。

神隠し。人が突然いなくなるという現象のことだ。天狗のしわざや、心因性ヒステリーによるものなどと様々に聞く。

斗真の世界では、神隠しがそれこそ頻繁にあつて、深刻な問題になっっているそうだ。

あたしがはじめに訪れた廃墟の町は、ふたつの世界を行き来できてしまう場所が、空間の癒着が多く発生していたために、まるごと潰されたらしい。そんな憂き目に遭ったのはその町だけじゃない。神隠しと町の壊滅とで、人口は減少する一方だ。

「年寄りには陰が陽を蝕んでるとか言ってる。陰の人間が、陽の人間をたぶらかして連れていく、ってな」

私を見下ろす斗真の頬に、自虐的な笑みが浮かぶ。

「俺もたぶらかされたってことになるんだろ。ばかばかしい、あの利己的で排他主義な世界が嫌になって、みんな出ていっただけかもしれないのに」

ぎり、と爪を噛む。彼は、自分自身の中にもある閉鎖的な考えをこころよく思っていない。あたしを助けてくれたのも、培われてきた思想に反抗するためだ。

『俺は俺の生き方を、自分で決められるようになりたい』

出会ったときに、彼はそう言った。

しみりしていると、ふいに斗真が慌てたようにあたしの手をとった。

そうだ、ここは女子トイレなんだった。幸運にも誰に見咎められることなく、胸をなで下ろす。

あたしが向こうの世界に行っているあいだも、時間は変わらず流れていたみたいだ。壁の時計を見てみると、午後六時前。もうすぐ閉館だ。

閲覧室の窓際の机に、あたしの勉強道具と手提げカバンがそのまま残っていた。お財布や貴重品が無事だったことにホッとす。

「佐倉さん？ どこ行ってたの」

顔なじみの司書さんが声をかけてきた。年は四十近いと聞いたけれど、若ぶりで気さくなお姉さんだ。

「あら？ 逢い引きしてたのね。もー、心配したじゃない」

彼女は斗真を彼氏と勘違いして、楽しそうな足取りで仕事に戻っ

ていった。

否定しそこねて恥ずかしがるあたしを見て、斗真が困った顔をす
る。

「おまえは、嫌なのか？」

胸をくすぐる低い小声で、問う。

「俺はもう、一花と離れる気はないんだけどな」

「あ、あの、……えっと。その」

あたしは俯いた。きつと顔、赤くなってる。

こつちの世界についてきてくれた斗真の気持ち、本当はわかつて
る。あたしだって、もう、彼がいなくなるなんて考えもしない。

出会って数時間　ううん、きつと出会った瞬間に、あたしたち
は恋に落ちてたんだ。

図書館をあとにして、あたしは途方に暮れていた。

一人暮らしならまだなんとかなっただろうに、あいにくあたしは親の庇護下にある一介の女子高生。しかも午後六時半の門限付き。すでに、まっすぐ帰ってくるようにと電話があった。

寒い季節でもないから適当にそのへんで寝ると斗真は言う。とはいえ、補導されるような年齢ではないけれど、こっちの世界のこと知らないんだもの。心配。

誰か斗真を泊めてくれる知り合いはいないかと、必死に思考を巡らせた。でも、中学から私学の女子校育ちなのもあって、親しい男友達なんていないから無理な話。

カバンを抱いてトボトボと歩きはじめたあたしに、斗真は黙ってついてくる。歩幅の関係ですぐに隣りに並ばれてしまう。

遮られた夕焼けは眩しくて綺麗で、見上げた彼の髪が真っ赤に見えた。頬骨が作る陰影に、つい息をこらしてしまう。

車の往来で騒がしい通りを、あたしたちは無言で歩いた。あたしも彼も、もともと口数が多いほうじゃない。静かなのは慣れっこのはずなのに、首のうしろが羽根帚でくすぐられてるみたい。

自宅まではあつというまで、ガレージを見ると父親の車があった。珍しく早いお帰りだ。こんな日に限って、と思わずふくれてしまう。母親だけなら、せめて夕飯だけでも斗真を家にあげることができたかもしれないのに。ふだんあまり会うことのない父親相手に、斗真を紹介する方法なんてちっとも思い浮かばない。

「どうした。早く入りな」

にこ、と笑みを浮かべて、斗真があたしを促す。でも、ここでさっさとドアを開けたら、斗真はどこへ行っちゃうの？

「俺もいい年だから、なんとでもするって」

あたしの不安を見透かしたように、そんなに得意そうでもない笑

顔を作つて言う。泣きそうになるあたしの髪を撫で、背中を押す。

「また、明日」

「あ……明日っ、朝あだし、図書館に行くから」

「了解」

平気そうに、でもやっぱり寂しそうに笑った彼の手を、あたしはぎゅっと握った。これ以上は涙をこらえなくて、逃げるように家中に入った。

すぐに、ドアにはめ込まれた磨りガラスの小窓から外を伺う。

斗真の影がしばらく佇んでいて、いなくなったとき、あたしはドアに頭をくっつけて泣いた。

「おかえり、一花？」

背中に母親の声降ってくる。慌てて手首で涙を拭う。ただいま、と答える声は掠れてしまった。

風邪ひきを装い、洗面所に直行する。うがいをして、顔を洗って……夕飯の前にお風呂が習慣の家なので、そのまま制服を脱いだ。立ち上る湯気が目に沁みる。

斗真、どうしてるだろう。中身は少ないけど、お財布を預ければよかった。向こうの世界の硬貨はこっちのと似ていたけれど、使える保証なんてない。

お湯に浸かっている自分が、ものすごく薄情で情けなかった。いつもは平気で一時間とか入っちゃうのだけど早々にがる。

部屋着に着替えて台所をのぞくと、父親が新聞を広げて黙々と口を動かしていた。ちらっとあたしを見て、顎を少し動かしたただけで、おかえりは言わない。

あたしは、お疲れ様、とだけ言って向かいの席につく。

「月曜から中間考査ね」

母親も座りながら、おもむろに会話を始めようとする。わが家でおしゃべりなのはこの人だけだ。

「閉館までいるなんて、よっぽど熱心に勉強してたのね。どう、高等部はやっぱレベルが高い？」

高等部は特進クラスがあるので、内部進学の子より、編入してくる子のほうが秀才肌が多いのは確かだった。あたしも特進ではあるけれど、四月のテストで多少の挫折は味わってる。

今、日常を思い出したくなかった。何も逃避しようってわけじゃない。

大事なのは、斗真のこと。彼が無事に夜を越せるかどうか、私もこれからどうするつもりなのか……。

明日の土曜日と、日曜日はできるだけ一緒にいて、きちんと考えたい。

「ほら、いただきますでしょ？」

黙り込むあたしを見て、母親が合掌して首を傾げた。過保護気味だけど、過干渉じゃない人だから、試験の話を引きずる気はないらしい。ありがたくて、肩から力が抜ける。

けれど、徹底した粗食メニューをみおろして、あたしは表情をなくした。

うちは昔から、嗜好品とかおしゃれとか、そういったものを許容してくれる家庭じゃなかった。明日、着ていく服のことを考えて気が重くなる。デートするようなかわいい服、持ってない。制服がいちばんかわいいかもしれない。

さらに食欲はなくなつて、いただきますは言ったものの、発芽玄米ごはんを一口、二口食べたところで席を立った。

深追いはしない親に半分感謝しつつ、歯磨きをして二階に上がる。ベッドで薄い布団を引きかぶって、強引に目をつぶった。午前の授業と、放課後の試験対策と異世界のこととで、思っていたより頭も体も疲れている。

ぼんやり、てのひらに斗真の温もりを思い出していると、いつのまにか眠りに落ちていた。

早く寝たものだから、夜が明ける前に目が覚めた。母親はすでに貸し農園に出かけたあとらしかった。

父親が起きてこないうちにお弁当を作ろうと炊飯器をしかけてから、今日着る服を選ぶ。部屋着に近い普段着か、思いっきりよそいき用しかなくて泣きそうになる。センスに自信がないので、悩んだ挙句に結局、制服を着ていくことにした。親には学校で自習するだけでも置き手紙しておけばいい。

タッパーにおむすびと玉子焼き、野菜炒めとがんもどきを詰め込んでシヨルダーバッグに入れる。もっとお肉っぽいものを入れたかったけれど、わが家には質素な食材しかなくて、色合いも地味で残念だった。

台所の片付けをしているうちに時計の針が六時をまわり、父親が起きてきた。休日はいつも朝寝坊なはずなのに。音を立てすぎたかと反省していると、

「どこか出かけるのか……？」

寝癖がついたまま、父親が尋ねてきた。久しぶりに聞いた声がかすれているのは、起きたばかりだからだろうか？

「自習室に行こうと思って。あ、お弁当の残り物だけど、お皿に置いてるから、食べて」

あたしは泡のついた食器をすすぎながら答えた。つい、早口になってしまう。

父親は、そうか、と玉子焼きつまんだ。

「母さんのより味がしっかりしてるな」

褒めてくれていいのか、よくわからない無感動な声。

「まあ、あまり無理をしないように、早く帰ってきなさい」

言い残して、シャワーを浴びにいつてしまった。仕事一辺倒な人だと思っていたのに、娘を心配することもできるんだ……。嘘をつ

いたことが少し悔やまれた。一応、置き手紙を残して家を出る。

まだ早い時間の空気は冷たく、通りにはまだ車も人もまばらだった。まず図書館に行ってみただけで門が閉まっていた。見回してみても、まだ斗真の姿はない。

由真ちゃんの携帯がそのまま使えたのだから、私も斗真と番号交換をしておくんだった。探しにいこうにも、彼が行きそうところなんて見当がつかないし。

図書館前のバス停のベンチに座り、気を紛らわすために英単語帳をひらいた。スペルを眺めているだけで頭に入ってくるわけじゃない、でも、ほかに何をしていたらいいかわからないのだ。

バスが何回もやってきて、あたしに乗車伺いをしていった。

だからあたしは、道路のほうにしか注意が向いていなくて、うるから肩を叩かれたときは思わず声が出た。

「よ」

短い挨拶が降ってきた。振り向くと、さつき発車していったバスを見送る斗真がいた。斜め下から見上げる彼は、逆光の中おだやかな顔をしている。

「おはよう……っ」

勢いよく立ち上がったはずみで、ベンチが斗真のほうに倒れてぶつかった。平気そうにしてるけど、膝、けっこう痛かったに違いない。

「ごめんね、大丈夫、？」

駆け寄ったあたしは、そのまま斗真に抱きすくめられた。シャツ越しの胸は筋肉がついていて、あつたかい。

「こんなに早くから待ってるとは思わなかった。ちゃんと寝たのか？」

斗真、どんな顔してるんだろう。声がちょっとだけ、弾んでいるように聞こえる。

あたしだつて見つめ合うのは恥ずかしいけれど、こうして抱きしめられているのも、かなり、恥ずかしいのに。

ジョギングの人が走ってきてようやく、斗真はあたしを離してくれた。互いに別の方向を向いて、言葉もなく、やがてどちらからもなく手をつないだ。

開館まで、まだ一時間ある。図書館に行かなきゃ行けない理由もとくになく、あたしたちはあてもなく歩きだす。さりげなく斗真が荷物を持ってくれる。

彼は昨晚、突発的にバイトをして、その職場の気のいいおじさんの家に泊めてもらったらしい。そういうことってできるんだ、とあたしは驚くと同時に感心した。同じ立場に置かれたとしても、あたしには到底できそうにない。

尊敬したくなつて斗真を見上げる。

彼はあたしの視線に気づいて、こちらに少しだけ顔を向ける。

「しばらくの宿は確保したから、心配するな」

つないだ手に力が入った。どぎまぎしながらも、あたしも握り返す。

最近になつて整備された河川敷の広場で、あたたかくなりはじめた陽光を浴びながら、あたしたちはくつついていた。

木目の綺麗なベンチの前を犬の散歩の人が横切り、何かの運動部が集団で走っていく。

こんな、のんびりした時間を過ごすのはひさしぶりかもしれない。時が止まってしまえばいい、とはこういうことを言うのだと実感する。

あたしたちの前に困難はないように思えた。

でもそれは、あたしの勘違いでしかなかったんだ。

目を閉じて、斗真の肩というより上腕に頭を預けていると、ふと足の裏に揺れを感じた。歩いている人たちは気にもとめないような弱い地震だ。ここは火山の近い町なのでちょっとやそつとの地震は慣れっこだ。

「揺れたねー。震度一ぐらいかな」

けれど斗真は表情を固くし、膝に握りこぶしをあてて口の端を歪めた。その手にあたしが触れると、弾かれたようにこちらを見る。

唇を引き結び、空を仰ぐ。

「向こうでは、地面が揺れるのは」

何か言いよどんで、斗真は首を振った。

「ここは、違うもんな」

自己完結してこぶしを解く。そして、あたしの手をつかんで立ち上がった。

「せつかくだから色々見てまわりたい。長く住めるなら、住みたいし」

「おじさんのところは、いつまで居れそうなの？」

「そう長くも居座れないだろ。アパートでも借りればいいんだが、どうかな」

「あつ、保証人がいるんだっけ？」

「こつちでも似たような感じなのか。そうしたら、住民票もいるよな……」

斗真はぶつぶつ呟いている。

住民票といえば、中等部に入学するときの手続きで、母親と一緒に役場にもらいにいった気がする。恥ずかしながら、それがどういうものかいまだによく知らないのだけれど、やっぱり重要なものなんだろうか。

「戸籍なんかもこつちの世界には存在しないはずだよな。まあ、何

もなしでも貸してくれるところはあるだろうから、片っ端からあたってみるか」

あたしでは力になれないようだと言っていると、

「一花は心配性だな？ ……心配かけてごめんな」

斗真が申し訳なさそうに眉を下げた。

「俺、午後から仕事だしさ。時間あるうちに、な」

ずっと一緒にいられるとばかり思っていたあたしは、露骨にがっかりしてしまった。

でも、当面は斗真の寝場所があるということとで安心感があった。

彼の言った通り、ここの世界では向こうの世界の人間を区別できないみたいだ。

遊歩道をゆきながら、時々立ち止まったり、草の上に座ったりしながら、あたしたちは言葉に詰まりながらだけれど、たくさんのことを話した。お互いの顔も少しずつ、見つめ合えるようになった。

斗真は一見ぶあいそうなのに、喋っているとすごく優しい顔をする。あたしにだけだといいな、とひそかに考えては、耳が熱くなった。

お弁当を食べたら今日はお別れと思うと寂しかった。でも、明日もお昼までは一緒にいれるみたいだし、明後日からは日中に働くそうなので放課後には会える。

斗真も玉子焼きを褒めてくれた。自分が作った料理を美味しそうに食べてくれるのって、嬉しい。

胸の中にある不安の火はくすぶり続けていたけれど、いずれ綺麗に消え去ってくれるものと、この時のあたしはまだ思っていた。

「頼みがあるんだけど」

土曜日、日曜日と数時間のお散歩デートをして、最後の別れ際に斗真が言った。

「もし、由真をまた見かけることがあったら教えてほしい」

すっかり彼女の存在が頭から飛んでいたあたしは、恥ずかしさを押し隠して頷いた。兄である斗真が、由真ちゃんを気にしていないわけがなかったのだ。

こつちの世界で、斗真の携帯は使えない。由真ちゃんはふつうに使っていたのに、何が違うんだろう。

あたしから斗真に連絡をとる手段は今のところなかった。とりあえず、待ち合わせ場所は図書館前のバス停だ。明日はあたしは中間考査初日だから三限で終わる。斗真は夕方までバイトだ。工事現場での作業で、体力を使うみたい。会つのも、あまり無理させないようにしなきゃ……。

学校の自習室に寄って勉強してから帰ると、両親とも家にいた。母親は夕飯の準備をしていて、父親は居間でテレビを見ていた。

ふたりともあたしにおかえりを言うと、またすぐにそれぞれの時間に戻る。あたしも洗面所に直行して、お風呂に入る。そしてごはん。解散。平日も休日も大差ない時が流れる。

部屋にあかりを灯して、机についた。日記を書く習慣はなかったのだけれど、斗真に会ってからはなんとなく気持ちを書きとめておきたくて、お気に入りを使わないでいたノートに万年筆で丁寧に綴る。三日目のページは、前日までのより彼の名前が増えていた。

もう少し、勉強してから寝ることにする。徹夜はしない主義だけれど、あまりにもな成績をとってしまったら、さすがにうちの親たちも厳しく追求するだろう。斗真のことが知れたら、付き合うことに口を出される可能性だってあるのだ。

夜が更けた頃、また地震があった。

あたしにとつてはただ地面が揺れるだけのことでも、向こうの世界ではかなり重大なことのようにだった。そして、地震という言葉を彼は知らなかった。

「ちゃんと、訊いたほうがよかったかな」

斗真の深刻そうな気配を見過ごしてしまったことを今さら反省する。一緒にいることに浮かれて、ほかに何かへまをやらかしていないだろうか。

もともとあたしはクラスでも浮いていて、人付き合いに自信があるほうじゃない。そんなあたしが、いきなり男の人と交際しようだなんておこがましかったのかもしれない……。――。

明日はうまくコミュニケーションできますように、と願って布団に入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9040y/>

ふたつの世界

2012年1月6日08時45分発行